

石神遺跡発掘調査報告 I

—石造物出土地の調査—

第 I 章 序 言

第 1 節 調査の経緯

石神遺跡は奈良県高市郡明日香村飛鳥に所在する 7 世紀の一大遺跡で、飛鳥寺の北側、甘樺丘の東方に位置している。明治35・36年（1902・1903）に小字石神の水田から、いわゆる須弥山石と石人像が出土して以来、21世紀の今日にいたるまで、すでに120年が経過している。

その研究の歴史には、大きく見て 2 つの側面がある。1 つ目は齊明朝の饗宴場（または饗宴施設）説で、須弥山石の性格に関する学説とは必ず一体で論じられる。もう 1 つは石神遺跡周辺を飛鳥淨御原宮に比定する学説である。2 つの学説はとくに融合することなく、それぞれが別々に論じられてきた。石神遺跡で実施された過去の発掘調査は、すべてこれら伏線のいずれかと関係していると言っても過言ではない。奈良文化財研究所（2000 年以前は奈良国立文化財研究所）が 30 年近い歳月をかけて実施してきた継続的な発掘調査も、むろんその例外ではないのである。

現在の石神遺跡は、1980 年頃までは「飛鳥淨御原宮推定地」と呼ばれていた。この宮跡が飛鳥小学校とその東側隣接地にあたるとする学説が、古くに喜田貞吉によって唱えられたからである。¹⁾ 昭和 4 年の発掘調査では、小学校の校地内で「石葺」を確認し、発掘者は「飛鳥淨見原宮址」の遺構と考えたが、調査はごく狭い範囲に限られていた。いっぽう、小学校の東方にあら小字石神の水田では、明治 35・36 年に異形の石造物が出土しており、出土直後から齊明紀の須弥山に関連づける学説が登場していた。²⁾ 昭和 11 年の発掘調査では、出土地付近で石組溝や石敷を確認し、齊明朝の饗宴場跡であると後年考えられるにいたった。³⁾ つまり、飛鳥小学校とその一帯は、地名等からの考証や部分的な発掘調査によって、齊明朝から天武朝にかけての重要遺跡であると古くから考えられてきたのである。しかしながら、発掘調査がごく一部に限られていたため、遺跡の全容は長らく、まったくあきらかでなかった。

しかし戦後、飛鳥寺の発掘調査が進み、その伽藍や寺域があきらかになったことで、飛鳥寺の北方に位置する飛鳥淨御原宮推定地が、にわかに注目されるようになった。とりわけ、飛鳥寺北面大垣の確認（1977）⁵⁾ によって、小字石神の水田が飛鳥寺寺域の西北隅にあたることが判明した。さらにこのとき、飛鳥寺西門前を通るとされた中ツ道と、壬申の乱時の「飛鳥寺北路」との交点が、小字石神の水田東南部に想定されることになったため、新たな視点による全

面的な調査が必要となってきたという（『藤原概報12』55頁）。また同宮推定地の近傍では、齐明朝の漏刻台跡である水落遺跡が発見されており、昭和51年（1976）には国史跡に指定されている⁶⁾。周辺における最新の調査成果に鑑み、奈良国立文化財研究所が同宮推定地の発掘調査に着手したのは、昭和56年（1981）のことである。飛鳥小学校とその東方地区について、「石神遺跡」という遺跡名が用いられたのはこのときが最初であるが、それはまだ仮称であって、第2次調査時までは「飛鳥淨御原宮推定地」と呼ばれていた。この遺跡名が奈文研の刊行物で定着する⁷⁾のは、1982年の下半期である。

奈文研による継続的な発掘調査は、このように小字石神（飛鳥287番地）の水田を起点とし、飛鳥淨御原宮推定地の調査として始まった。その後は年度ごとに水田を1面ずつ借り受け、第21次調査（2008）まで発掘調査を継続した。平成22年度（2009）からは報告書作成のための整理作業を開始したものの、第3次調査時に検出した東西塀SA600・560等や東西溝SD347が、その東側隣接地である第1次調査区で未検出であることが、報告書の執筆を進めるうえで大きな課題となってきた。とりわけSA600は、石組溝SD334・335等の曲折に沿うかたちで、第1次調査区で北へと折れていることが予測されたため、その柱穴を実際に検出して確かめる必要が生じていた。

そこで令和5年度（2023）には、水田の地権者である辻本武史氏の承諾を得たうえで、第1次調査区の再発掘を42年ぶりに実施した（飛鳥藤原第214次調査）。その結果、SA600がSD335の手前で北へと折れていることが確認できたため、第1次調査の成果を部分的に修正することとした。こうして本書では、おもに第1～4次調査の記録に基づきつつも、それらを再解釈し、そのうえ再調査を実施したことによって、石神遺跡に関する従来の認識を修正することができた。

なお令和3・4年度（2021・2022）には、第1次調査地の東側隣接地（飛鳥302番地）でも発掘調査（飛鳥藤原第209・212次）をおこない、石神遺跡東方での学術調査に着手している。これらは石神遺跡におけるこれまでの調査範囲を東へと拡張し、古代遺構の存否や範囲を確認するのが目的の調査である。これらは石神第21次までの一連の調査とは別の契機と計画とに基づく発掘調査であるため、本書はその成果を含まない。

-
- 1) 喜田貞吉「飛鳥の京（下の下）」『歴史地理』12-5、1912年。
 - 2) 中岡清一「飛鳥淨見原宮址ノ一部発掘ニ就テ=宮瀧ニ於ケル吉野離宮トノ関係明瞭トナラン=」1929年。
 - 3) 高橋健自「飛鳥発見の石造遺物」『考古界』3-5、1903年。
 - 4) 石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡」『飛鳥隨想』1972年、学生社および矢島恭介「飛鳥の須弥山と石彫人物について」『国華』58-12、1949年。
 - 5) 「飛鳥寺北方の調査」『藤原概報8』1978年。
 - 6) 奈文研『藤原報告IV—飛鳥水落遺跡の調査—』奈文研学報第55冊、1995年。
 - 7) 「飛鳥淨御原宮推定地の調査」『藤原概報12』1982年。その47頁には、「今年度より同推定地解明の糸口となる小字「石神」の水田（石神遺跡と仮称する）の調査を開始した。」と見える。
 - 8) 「飛鳥淨御原宮推定地の調査（石神遺跡第2次）」『藤原概報13』1983年。
 - 9) 「飛鳥水落・石神遺跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報1982』。この年報は註7) 前掲文献の刊行（1982年4月）より遅く、1982年11月の刊行である。
 - 10) 松永悦枝・谷澤亜里「石神遺跡東方の調査—第209・212次」『発掘調査報告2023』。

第2節 調査組織

本報告書は、石神遺跡第1次調査から同第4次調査までと、石神遺跡1990-1次調査、飛鳥藤原第214次調査等の調査報告である。以下に調査責任者と担当者・現場班の調査員を掲げ、それ以外の調査関係者一括して列記する（＊は研究補佐員、＊＊はアソシエイトフェロー）。

調査次数	年 度	所 長	部 長	調査担当者	調 査 員
石神遺跡第1次	1981	坪井清足	狩野 久	西口壽生	木下正史 今泉隆雄 滝本正志*
石神遺跡第2次	1982	坪井清足	狩野 久	上原真人	木下正史 西口壽生 清水真一 泉 雄二* 滝本正志*
石神遺跡第3次	1983	坪井清足	狩野 久	清水真一	木下正史 西口壽生 清水真一 立木 修 泉 雄二*
石神遺跡第4次	1984	坪井清足	狩野 久	川越俊一	村上訊一 岩本正二 泉 雄二*
石神遺跡1990-1次	1990	鈴木嘉吉 牛川喜幸 深澤芳樹		安田龍太郎 佐伯博光*	
井上和人、岩本圭輔、上野邦一、大林達夫*、菅原正明、土肥 孝、納谷守幸*、藤田広幸*、宮川伴子*					
					（以上、奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部）
飛鳥藤原第214次	2023	本中 真 箱崎和久 福嶋啓人 森川 実 谷澤亜里 樋口典昭**			
					（国立文化財機構奈良文化財研究所 都城発掘調査部）

第3節 報告書の作成

奈良文化財研究所による石神遺跡の発掘調査は、第1次調査（1981）から第21次調査（2008）までの28年にわたり、調査面積は延べ17,800m²におよんでいる。出土遺物も膨大で、とくに土器は整理用の木箱で4,788箱にのぼっている。これは明日香村内で出土し、わが研究所が収蔵している土器の55%を占めている（令和5年度現在）。しかし、調査中は整理作業に着手できなかつたため、報告書刊行に向けた本格的な作業は平成22年度（2010）から着手することとなつた。また、平成23年度（2011）には第15～19次調査の範囲を除く、北限の区画施設（第21次調査区）以南を報告対象とし、平成27年度（2015）の刊行を目指すことが確認された。

整理作業着手からの数年間は、出土土器の注記作業や遺構図等の整理、出土遺物の実測作業等を継続したものの、作業は遅々として進まなかつた。そこで2015年頃には、出土遺物や検討事項の多さに鑑み、報告書を数次分ごとにまとめ、分割して刊行してゆく方針が担当者側から提案された。本書はその第1冊にあたり、第1次から第4次調査までを報告の対象としている。本書以後は、第5次から第9次調査までを『石神遺跡発掘調査報告Ⅱ』、第10次から第12次調査までを『石神遺跡発掘調査報告Ⅲ』としてまとめ、逐次刊行してゆく予定である。

報告書の作成は、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）においておこなつた。出土資料の整理作業は、発掘調査および検出遺構の整理を遺構研究室が、出土遺物のうち木製品・金属製品・

石製品・冶金関係遺物を考古第一研究室、土器類を考古第二研究室、瓦類を考古第三研究室、木簡を史料研究室（令和5年度まで）がそれぞれ担当しておこなった。井戸SE800出土土師器甕の残存脂質分析はサンプル採取・調整、GC-MSによる分析を村上夏希（現・昭和女子大学）、鈴木美穂・庄田慎矢が、個別脂肪酸の安定炭素同位体比の測定はリュキャン アレクサンドル・クレイグ オリヴァー（ヨーク大学）がおこなった。また、木製品の樹種の調査は小林克也（株）パレオ・ラボ）、石組溝SD335堆積物の土壤分析には村田泰輔があたった。

なお本書では、遺構・遺物の年代観や遺跡の時期区分・遺構変遷に関する修正案を提示した。本書ではこれを「新案」という。新案には既刊の概報・紀要等に示した、調査時の見解や解釈と異なる点もあるが、本書をもって現時点での正式見解としたい。

1. 本書の執筆分担は次の通りである。

第Ⅰ章 序 言	森川 実
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境と発掘史 1～3節	森川 実
第Ⅲ章 調 査 1・2節	森川 実
	3節 福嶋啓人
第Ⅳ章 遺 跡 1～3節	森川 実
	4節 福嶋啓人
第Ⅴ章 遺 物 1節	森川 実 (A～B iii・B v～K)・ 山藤正敏 (B iv)
2節	岩永 玲
3節	松永悦枝（現・文化庁）・山本 崇
4～6節	松永悦枝
7節	谷澤亜里 (A)・松永悦枝 (B) 谷澤亜里・松永悦枝 (C)・岩永 玲 (D)
第Ⅵ章 自然科学分析 1節	村上夏希（現・昭和女子大学）・ 庄田慎矢・森川 実
2節	小林克也（株）パレオ・ラボ
3節	村田泰輔
第Ⅶ章 考 察 1節	森川 実
2節	岩永 玲
3節	松永悦枝
4節	森川 実
5節	福嶋啓人
第Ⅷ章 総 括	森川 実
附 篇 小字石神出土の石造物	森川 実
英文要旨	原文作成 森川 実
	英文翻訳 山藤正敏

2. 第1～4次調査時（1981～1984）における遺構の写真撮影は、おもに井上直夫がおこなった。また、第214次調査（2024）の遺構と、出土遺物の写真撮影は栗山雅夫がおこな

った。このほか、飛鳥287番地の現況写真と石造物の写真は、飯田ゆりあの撮影による。

3. 図面・図版、挿図、表の作成は各執筆者が分担してあたり、以下の各氏の協力を得た。

稻田登志子、乾 陽子、井上富美子、井上美穂、入倉美奈子、入谷敦子、笠谷香代、清水比奈子、玉木学恵、寺口茂子、長田美知代、成迫智美、西村孝子、藤田順子、牧村幸代、増田朋子、松田麻美、森 由季子、森田和世、森山そらの

4. 奈良国立文化財研究所、奈良文化財研究所の出版物に関しては下記の略称を使用した。

また本書では、機関名も「奈文研」と省略する。

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』	→	『藤原概報26』
『奈良国立文化財研究所年報2000-II』	→	『年報2000-II』
『奈良文化財研究所紀要2009』	→	『紀要2009』
『奈良文化財研究所発掘調査報告2023』	→	『発掘調査報告2023』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告V』	→	『藤原報告V』
『山田寺跡発掘調査報告』	→	『山田寺報告』
『吉備池廃寺発掘調査報告』	→	『吉備池報告』
『飛鳥池遺跡発掘調査報告』	→	『飛鳥池報告』
『平城宮発掘調査報告VII』	→	『平城報告VII』

5. 遺構図の座標値は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海拔高で表す。なお、2002年4月1日からの改正測量法の施行とともに、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、石神遺跡第1～4次調査はすべて日本測地系に拠っているので、本書の平面座標は日本測地系で表示し、()内に世界測地系の数値を示した。

6. 発掘調査で検出した遺構は、文化庁編『発掘調査のてびき』、2010年に準拠し、遺構の種別を示す記号と一連の番号との組み合わせ（下記）により表記した。

SA（塙）、SB（建物）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）、SG（池）、
SI（堅穴建物）、SK（土坑）、SX（その他）、NR（流路）

7. 7世紀および藤原宮期の土器の年代は、『藤原報告II』等に準じ、飛鳥I～Vと表す。

8. 飛鳥・藤原地域および平城宮・京出土軒瓦の型式名は、下記文献の記載に準じる。

花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集XI』奈文研、2000年。

花谷 浩「石神遺跡の瓦」『紀要2004』。

奈文研『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年。

9. 石神遺跡における既往の時期区分（旧案：A～C期）に代わり、本書では新案（I～III期）を考案し、これを採用した。新案は旧案に比し、時期区分の基準を大きく改めている。本書では文脈に応じ、旧案で遺構の時期を表示することもあるが、IV・V章およびVII章ではとくに断らないかぎり、新案の時期区分を用いた。

10. 第1次調査時にはSD135など、100番台の遺構番号を付していたが、第2次調査以降は、これらを300番台に置き換えている。本書でも後者に準じ、SD335などに統一した。

11. 訳は原則として、各章・各節ごとにそれぞれの末尾にまとめた。

12. 本書の編集は都城発掘調査部長箱崎和久の指導のもと、森川 実がおこなった。